

第 8 4 4 号 ヤスクニ通信 2025 年 5 月 11 日

日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会

<祈りのために>

四十日たって、ノアは自分が造った箱舟の窓を開き、鳥を放した。（創世記 8 章 6～7 節）

イザヤ書 34 章には「主はすべての国に向かって憤りを発し」（2 節）と、神の恐るべき裁きが予告されていますが、ネットで見たプロテスタントのある教会は、その中の「天の全軍は衰え、天は巻物のように巻き上げられる」（4 節）について次のように説教していました。「かつて…広島と長崎に原爆が投下されましたが、その時、天はどのようにになりましたか？きのこ雲が空高く渦巻きました。そうです、天は巻物のように巻かれるのです。やがて起こる世界規模の戦争においてはこの核も使用されるということです。そして世界中にあのきのこ雲がわき起こるようになるのです」。私はこれを見て正気なのかと思ったのですが、世の中には本気でこんなことを説いている教会があるのです。全面核戦争になったら自分も死んでしまうではないか？彼らはそうは考えません。「神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます」（I テサロニケ 4 章 16～17 節）を文字通り信じているからです。アメリカの著名なテレビ伝道師ジェリー・ファルウェル氏は、核兵器が使用される世界最終戦争（ハルマゲドン）が一向に気にならないことについてこう語っていました。「私が全然心配していないことはご承知でしょう。…なにしろ私はそこにいないんですからね」（福音と世界 2024 年 12 月号 17 ページ）。しかし、自分だけ助かれればそれで良いのでしょうか。

創世記で、大洪水は第二の月の 17 日に始まりました。雨が四十日四十夜降り続き、水は 150 日の間、地上で勢いを失わず、人も家畜も動物も空の鳥もことごとく大地からぬぐい去られました。しかし神がノアたちを御心に留められたので水は減って、第七の月の 17 日に箱舟はアララト山の上に止まり、第十の月の 1 日に山々の頂が現れました。それから 40 日たってノアはようやく窓を開き、鳥を放したのです。ノアはなぜ 40 日もの間待っていたのでしょうか。それはカルヴァンによると「彼が神のかくも恐るべき世界への裁きを目にして恐怖と不安に打ちのめされ、何をする気持ちにもなれなかった」からなのです。箱舟の窓から見える外の世界はまさに混沌（カオス）です。神の怒りのためあらゆる命が滅ぼされていった時、ノアの心中はどうだったでしょう。死んでいった人々もノアと同時代を生きた隣人だったのです。嵐の中、箱舟の狭い部屋の中で身をよせあい、必死に祈っているノアとその家族を想像してみてください。彼らは神の裁きが箱舟の外の被造物を滅ぼしつくし、自分たちにも迫ってくるかもしれないことを思って震え上がっていたのです。

世界の将来はわかりませんが、自分だけ助かれれば良いというような一部の教会の態度は、ノアと比べてもとうてい納得できるものではありません。「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない」（マタイ 7:21）。打ち砕かれ悔いる心をもって神を礼拝する者のところにこそ、オリーブの葉をくわえたハトが訪れるのです。

（祈り）

神様、これ以上お怒りにならないで下さい。主イエスの再臨を隣人とともに、恐れることなく待ち望むことが出来ますように。

井上豊（広島長束教会牧師）

問287 終わりの日に、神の国が実現するとは、どういうことですか。

答 終わりの日に、キリストはすべての権威と権力を滅ぼして、国を父なる神に渡されるのです。こうして、神の国は実現し、私たちは神との聖なる交わりに置かれ、永遠の祝福にあずかることができるのです。

この神の国実現の日まで、教会は神の国が近づいたことを告知しつつ、御国が来ることを祈りつづけるのです。

新 Q287-1 すべての権威と権力とは何ですか？

新 A287-1 それは、主の再臨の日に、この世に存在していて、神に由来しないで人間に属する権威と権力のすべてです。

新 Q287-2 すべての権力と権威に、教会は含まれないのですか？

新 A287-2 教会はキリストのからだですから、含まれません。教会は、罪を赦す権威を主から委ねられていますので、それを用いるのです。但し、その権威は主の御心に適う正しい用い方をされなければなりません。

新 Q287-3 キリストが父なる神に国を渡すのはなぜですか？

新 A287-3 御子は父から権威を委ねられた裁き主です。権威は、天地万物の創造者である、父なる神にあり、御子は審判の後、完成した神の国を父に渡し、その支配に服するのです。

（コリントの信徒への手紙一 15 章 28 節）

新 Q287-4 神の国が実現すると、私たちは神との聖なる交わりに置かれるのはなぜですか？

新 A287-4 主イエスが大祭司の祈り（ヨハネによる福音書 17 章）の中で、「父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです」と祈ってくださったからです。神の栄光は、主の十字架において現されました。ですから、主の十字架を仰ぐ者は誰でも、終わりの日に神との交わりに置かれるのです。

新 Q287-5 永遠の祝福とは何ですか？

新 A287-5 地上での祝福が一時的であるのに対して、天と地が一つとなって神の国が実現するので、神の祝福は永遠に続くのです。これも、御子によって与えられる祝福です。永遠の祝福にあずかるのは、永遠の命が与えられるからで、御子がそれを保証してくださっています。

新 Q287-6 教会も、神の国が近づいたことを告知するのですか？

新 A287-6 そうです。主イエスはヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼を受け、ガリラヤで、「時は満ちた。神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と福音を宣べ伝えました。主の十字架の死は、人間の罪の赦しのための完全な犠牲であり、復活は永遠の命の保証です。神の支配はこれ信じる者の中にあるのです。今主は聖霊において共におられるのですから、教会も聖霊の宮として、世の人々が神の救いの御業を信じて神の子とされるよう、一層宣教に努めなければなりません。

新 Q287-7 教会は、御国が来ることを祈り続けなければならないのですか？

新 A287-7 そうです。主ご自身が弟子たちに、「御国を来たせたまえ」と祈るよう教えられたのですから、使徒の信仰を受け継ぐ教会も、終わりの日まで、そう祈り続けなければなりません。神の支配は祈る者の中に在るからです。

祈る群れに聖霊が豊かに注がれ、聖霊に満たされた群れは祈り続けて、主の再臨を待ち望むのです。主が再び来られる時、御国が完成するのです。

北海道中会ヤスクニ・社会問題委員会の公開学習会について

ヤスクニ・社会問題委員会委員 塗 芳一

北海道中会ヤスクニ・社会問題委員会では、教会員が疑問に思うこと、知人から疑問を投げかけられた時にキリスト教会の立場を明快に説明できるよう学ぶことを主題の一つとしてきた。

年に二回の公開学習会を持っており、一回目はLGBTQ問題を取り上げた。今となっては言葉も内容もごく普通に理解し、受け止めることができるようになったが、最初は知らないことが多く新鮮に聞くことの連続であった。講師には一回目は牧師、二回目は当事者でもある道議会議員、三、四回目は大学教授といろいろな人の話を聞く中で多くの事柄と接することができた。

年二回の公開学習会の二回目は社会の問題を少しでも理解することに標準を合わせ、ロシアとウクライナの侵略戦争の中で、ロシア正教をどう理解するのかを取り上げた。無論西方キリスト教会が歴史的にどう政治に関与したかについては前々から良きにしろ悪きにしろ多少知識はあったが、ロシア正教は全くの無縁の教派であったため、道内のロシア正教会、釧路ハリストス正教会司祭から学んだ。

次に政治、人権問題として大きく取り上げられている統一教会も学習会の課題に挙げている。さらに今年度はイスラエルとハマスの戦争問題を取り上げた。旧約聖書創世記を読んでいて理解しにくい事柄の一つがイスラエルとパレスチナの問題である。どうしてあそこまで憎しみ合い、殺し合うのかという単純な疑問である。この疑問は多くの教会員の共通の疑問であると感じ、たまたま富良野伝道所小野寺泉牧師「『ガザ』におけるイスラエルとハマスの戦争について考えるために」という伝道所内の勉強会のために作成された小雑誌を読ませてもらい講師を依頼した。さらに、中会教師・元北星学園大学教員の古賀清敬牧師にも違う視点からの講演をお願いした。この学習会は2025年3月24日札幌琴似教会にて行われ、第一部は「イスラエルとイスラム原理主義との戦いをどう理解するか」副題：複雑なことを、複雑なまま受け止めると題して小野寺泉牧師、その後、「パレスチナ問題を聖書と歴史から考える」副題：土地取得、子孫、聖絶、預言と終末論などと題して古賀清敬牧師が講演された。30分の休憩を挿み、第二部は「10月7日からのGAZA」というフランスのジャーナリストが現地を撮影した映画の上映が行われた。ただ生々しい戦争の実態とともに多くの死者と体の一部が映されている恐ろしい作品であった。

講演内容は中会委員の本公開学習会担当の糸牧師から報告が上がることになっているのでそちらをご覧ください。私の感想では小野寺講師の副題のように複雑な歴史を踏まえた現状はすぐには理解しがたかった。講師の中ではパレスチナとハマスはある意味全く別の組織、国家と武装集団であり、ハマスはイスラム帝国の再建を願い、そのためにはどのような犠牲も厭わないとの認識があると思われた。ただそれも現状からくる分析であり、なぜイスラエル人とパレスチナ人が分かち合えず、平和が遠いのかを理解するには至らなかった。古賀牧師の講演では前から疑問に思っていた、イスラエルとカナンの違いについて、約束の土地に関する考え方が4つの土地取得についての諸見解で示され、よく理解できた。ただヨーロッパキリスト教国、アメリカのユダヤ人差別迫害の罪悪感とユダヤ財界の影響が大きく関与していることは理解したうえで、パレスチナ（ハマスを含む）に関する戦いには、やはり正統性が感じられないというのが私の感想であった。

<靖国関連ニュース>

○誰のための安全か

28日付の東京新聞記事「台湾有事沖縄12万人避難」を読んで、愕然とした。政府は、台湾有事を想定して沖縄県・先島諸島から住民や観光客ら12万人を九州・山口へ避難させる計画概要を発表。2026年度には沖縄で実動対応を含めた避難訓練を行う。記事を読みながら「ありったけの地獄を集めた」戦場と呼ばれた沖縄戦のことが脳裏をよぎった。悪夢の再来である。

同記事では、沖縄戦の前年、米軍の攻撃で沈没し学童など1484人が死亡した疎開船「対馬丸」事件を取り上げ、沖縄では避難への反発があると書く。しかし、問題は「なぜ学童が疎開させられたのか」である。

当時、サイパン陥落を受け、大本営は泉守紀（しゅき）沖縄県知事に対し、子どもや女性、高齢者などを本土や台湾へ疎開させるよう命令した。重要なのは、これは住民を危険から守るための避難ではなく、戦闘の足手まといになる「非戦闘員」を事前に排除するための移住だったということである。また、戦闘に向けた食料確保のための「口減らし」目的があったことも忘れてはならない。地元を離れることへの反発は強く、疎開は半ば強制的に行われた。

対馬丸事件は軍の作戦上の移住計画によって起きた悲劇だった。「国民保護」の化けの皮を被った戦争準備が着々と進む今、国民は再び騙されてはならない。（東京新聞本音のコラム、25.03.31、大矢英代カリフォルニア州立大助教授）

○戦後80年 歴史の教訓 首相談話で

第2次世界大戦後の国際秩序が大きく揺らぐ中、日本は戦後80年の節目を迎える。

国策を誤り、国民を存亡の危機に陥れ、アジアをはじめ諸外国の人々にも甚大な被害を与えた歴史の教訓を改めて思い起こし、平和国家としての誓いを新たにすることには、今日の意義がある。

石破首相は、首相個人としてのメッセージなどではなく、過去3回の節目と同様、閣議決定した「首相談話」の形で、内外に日本の姿勢を明確に示すべきだ。

戦後50年にあたる1995年の終戦記念日に、時の村山首相は、日本の「植民地支配と侵略」について「痛切な反省」と「心からのおわび」を表明し、国際協調を通じて平和の理念と民主主義を広めるとした談話を発表した。戦後60年には小泉首相、戦後70年には安倍首相が、それぞれ談話を公表している。

戦後80年となり、実際に戦争を体験した人が少なくなる中、首相は繰り返し、先の戦争の「検証」の重要性を指摘してきた。有識者による私的諮問機関を設ける意向だが、閣議決定を伴う談話は見送り、個人としてのメッセージを出す方針だという。

自民党内には、安倍談話によって戦後の「謝罪外交」に区切りがついたとして、新たに談話を出すことに否定的な意見が根強い。政権基盤の弱い首相は、党内に亀裂を招く事態を避けたいのだろうが、あまりに内向きで、大局観を欠く判断と言うほかない。

安倍談話は「痛切な反省」と「心からのおわび」に言及しつつも、「私たちの子や孫、その先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはならない」と述べ、歴史認識をめぐる問題に終止符を打つ狙いが明らかだった。

しかし、過去の過ちを決して忘れず、未来に生かす誓いを更新し続けることは、日本への信頼を高めることにつながるはずだ。安倍談話のくびきにとらわれ、80年談話を見送ることになれば、国内的にも対外的にも、日本が反省を忘れたという誤ったメッセージにもなりかねない。

政府はこれまで、先の戦争を自前で総括することをしてこなかった。首相が今回、正面から検証に取り組むというのなら評価したい。首相談話を出さずに済ますための方便にしてはならない。

また、本格的な検証となれば、短時日で結論を得ることは難しだろう。終戦記念日の首相談話とは切り離し、期限を区切ることなく多角的な検討を加え、後世に残る成果をめざすべきだ。（朝日新聞社説、25.04.03）

○南西諸島を戦場にするな

「先の戦争の再来のようです」と声を落として言った。沖縄戦で祖父、母親、兄、妹など家族4人を失った石垣島に住む山里節子さん（いのちと暮らしを守るオバーたちの会代表）の恐怖だ。

「台湾有事」。南西諸島から12万人を避難させる計画を持つ政府は、戦争に参加するつもりようだ。避難といえば、マラリアがまん延する猖獗地へ追いやられ、家族を亡くした人も多い。

石垣島での基地設置と強化は、あつという間と言えるほどのスピードで進んだ。ついこの間までマンゴー畑を柔らかな風が渡っていた島の中心地が自衛隊基地と化した。石垣島に加えて宮古島や与那国島、台湾につながる南西諸島にミサイルが林立するようになった。

3月下旬、陸海空の各自衛隊を一元的に指揮する「統合作戦司令部」が発足。集団的自衛権の行使が可能となり、「防衛力の抜本的強化」が図られ、敵基地攻撃の司令部となる。さらに、横田基地（東京）の在日米軍司令部との連携が強化され、アメリカ側も「統合軍司令部」を創設。日本はその指揮下に従属するということなのか。

山里さんが「先の戦争の再来」と言うのは、住民を強制疎開させた、旧日本軍の戦術を思い起こさせるからだ。「石垣島に戦場はいらない」との横断幕を掲げて、毎週日曜日、山里さんたちはスタンディングで抗議している。（東京新聞本音のコラム、25.04.08、鎌田慧（ルポライター））

844号ヤスクニ通信 2025年5月11日 発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会 発行・編集 糸広国（函館相生教会）
--

<編集後記> 定期中会で決まった靖国問題関連委員会のメンバーは以下の通りです（○は委員長）。

北海道ヤスクニ・社会問題委員会：○稲生義裕、河野美文、糸広国、西村ひかり、熊敏彦、塗芳一、東京中会ヤスクニ・社会委員会：○金泰仁、芳賀繁浩、栗田英昭、伊藤明彦、近畿中会教会と国家に関する委員会：○植田恵、山本盾、澤田磐雄、林守男、九州中会靖国担当：○川越弘